第67号
（創刊：1994年12月15日）

Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報

南塘（なんとう）だより

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：福田眞作副病院長）
〒036-8563　弘前市本町53
TEL：0172-33-5111（代表）
FAX：0172-39-5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/
※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

2012年（平成24年）9月24日

病院長からの一言
～ダ・ヴィンチ効果～

弘前大学医学部
附属病院長　藤　　哲

2011年7月当附属病院では，東北・北海道で初めてとなる遠隔操作型内視鏡下手術支援システム“da Vinci Surgical System以下ダ・ヴィンチ手術”を導入しました。昨年の実績は24症例（泌尿器科15例・産科婦人科7例・消化器外科2例）でした。本年4月より泌尿器科の前立腺摘出術は保険収載され，さらに症例の増加が見込まれています。

実はこのダ・ヴィンチ手術は，約10年前整形外科の臨床講義で『医療安全』を依頼していた古川俊治慶応大学教授（外科・法科，現参議院議員）の講義で，臨床応用が紹介されました。学生は整形の講義なのになぜ『外科内視鏡手術』が出てくるのだと言っていましたが，私はこれはすごいと感動しました。自分の部屋で，Jazz を聴き Coffeeを飲みながら，リラックスして血管吻合ができるかもと思ったりもしました。

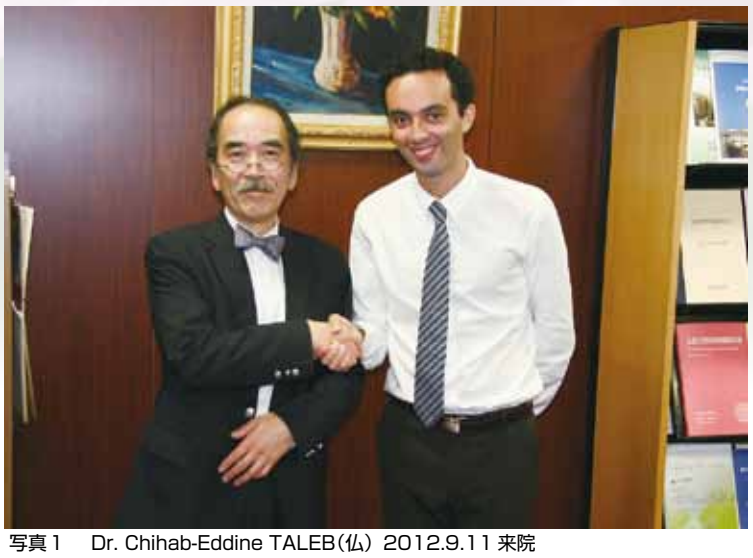

写真１　Dr. Chihab-Eddine TALEB(仏) 2012.9.11 来院

現在,『Robotic Microsurgery』なる言葉が既に存在し国際学会も発足しています。先日，若いながらこの手技のリサーチを続けてきたストラスブルグ(仏)のTaleb先生(写真１)が来院し講演しました。『術者の手首から先がスッポリ術野に入り操作ししかも邪魔にならない。ロボットが２台あれば二つの事が同時にできる。』という話は印象的でした。今後の最小侵襲手技が目指す方向であると感じました。

このダ・ヴィンチ手術導入の効果は，本年泌尿器科並びに産科婦人科への後期臨床研修医師数がそれぞれ７名と飛躍的に増加した事に繋がったと考えるのは私だけでしょうか？　もちろん両科の教授始め教室員の皆様の魅力的な教室作りの賜物でしょうが。

写真２　ダ・ヴィンチの前で大山教授と富山県議会議員視察団の皆様　2012.5.10 来院

又，この装置を見学に，東京都議会，富山県議会（写真2），青森県議会などの視察もありました。まさに『ダ・ヴィンチ効果』です。

“二匹目のドジョウ”ならぬ ダ・ヴィンチの次はと画策してる今日この頃です。

新任科長の自己紹介
～腫瘍内科科長に就任して～

腫瘍内科　科長　佐藤　　温

この度，7月16日付けで腫瘍内科学講座に着任いたしました，佐藤温です。私は，東京に生まれ，高等学校まで東京に通いましたが，大学は遠く沖縄の琉球大学に入学しました。沖縄では，座右の銘である「なんくるなぁいさぁ（何とかなるさ）」と最も大切にする言葉である「ぬちどぅたから（命が宝）」を学びました。卒業後は昭和大学附属豊洲病院消化器科に入局，消化器内科医そして臨床腫瘍内科医 (medical oncologist)として昭和大学および関連病院に従事してすでに24年が過ぎました。そこでは，実臨床を通して，目指すべき腫瘍内科医像とは何かという命題をずっと突き付けられていたように思います。

抗癌剤治療の対象となる固形癌患者の予後は大変に悪く，月単位の診療のうちに亡くなられる方が多いのが実状です。抗生剤治療が確立する以前の感染症に立ち向かった医師達の時代と同じ状況にあるように思えます。診療に従事する医師は知識・技術が必要です。そして加えて熱意，こころが必要なのです。医師は患者に対していち個人，いち人間として厳粛な態度で対峙しなければなりません。そこには医療の本質があると思います。私は理想的な腫瘍内科医像とは，臨床研究に優れた医師であることと同時に，本質的な医療を理解実践できる医師だと思います。癌領域の臨床現場は体力的にも精神的にも大変きついものではありますが，真摯な姿の患者から教えられるものも大変大きなものです。当科は，「理想的ながん医療の実践を通して形成される人間性豊かな医療社会」を目指します。その理念は「理想的ながん医療社会の構築への貢献」であり，そのための手段として，良質ながん診療の展開，がん医療に携わる医療人の育成，がん研究の推進に邁進いたします。横断的に診療を実践していくため，各診療科連携のもと，協調的に集学的治療を実践管理しなければなりません。さらに包括的ながん医療の実践のためには，ほぼ全ての医療職が積極的にかつそれぞれが専門的に関与してもらう必要があります。その先に答えがあるものと確信しております。

これから先，医療現場で「理想的ながん医療社会の構築」を青森で地域と社会と共に創造し，そしてこの地より発信してまいります。何卒，今後ともなお一層のご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

各診療科等の紹介
【栄養管理部】

栄養管理部は第１病棟１階の厨房と事務室，栄養指導室の３カ所で，福田眞作部長，松井淳副部長はじめ，平野管理栄養士長，他管理栄養士５名と給食業務を委託している会社のスタッフ46名の総勢54名の大所帯で入院患者さんの食事（栄養）管理と栄養食事指導業務を担っています。

入院中の患者さんの楽しみである「食事」は，出来るだけ手作りで地産地消をモットーに，温かいものは温かく，冷たいものは冷たく，患者さんに合わせた食事を提供できるように努めています。患者さんに少しでも満足いただけるように行事食や選択メニュー，お祝いメニュー（誕生日・出産）の実施，年２回の食事アンケート調査，毎食の残食調査などを行っています。また，食欲のない患者さんにはベッドサイドまで訪問して対応しています。患者さんより感謝のメッセージを頂くこともありとても励みになっています。

栄養食事指導は，平日の朝9時から16時まで，入院は予約制で外来は随時行っています。また，それぞれの診療科で集団指導による栄養教室を設けています。

４月からは，診療報酬の改定に伴い，業務が増えたため，若い管理栄養士２名が増員になり，ますます活気がでて参りました。引き続き医師とコ・メディカルが協働して患者さんの栄養管理に取り組んでいきますので，今後ともご指導ならびにご協力よろしくお願いします。

（栄養管理部長　福田眞作
文責　須藤信子）

先憂後楽
～シミュレータによる医学教育～

病院長補佐　加藤博之

平成23年12月より附属病院スキルアップトレーニングルームが開設され，おかげさまでその運営は徐々に軌道に乗りつつあります。スキルアップトレーニングルームには，医療技術を磨くための各種シミュレータが設置されています。最近のシミュレータは実に多彩です。旧来のマネキン人形スタイルのシミュレータもありますが，コンピュータや CG（コンピュータグラフィックス）と連動させることにより，一昔前のものに比べ驚くほど精巧で，高度のバーチャルリアリティを追求したものがたくさん登場してきています。たとえば消化管や肺の内視鏡シミュレータでは，模擬内視鏡を操作することによって，画面上にかなりリアルな CGの消化管や肺の内部構造や病変が現われ，内視鏡操作を進めるに従って，画像も移り変わり，あたかも自分が内視鏡検査を進めていっているような感覚を味わうことができます。他にも，腹腔鏡手術や関節鏡手術，さらに心臓カテーテル検査を模擬的に体験できるシミュレータも揃っています。これらのシミュレータを有効に活用するためには，その特徴を理解しておく必要があるでしょう。体験的，実践的に興味を持って学習に取り組むことができる点や，万一手技に失敗しても（実際の患者さんではないわけですから）100%安全な点などはシミュレータの利点といえます。しかし，もちろん限界もあります。視覚情報としての CGや心音・呼吸音などの音声情報はかなりのレベルにありますが，器具を操作したときの人体特有の感触・触感は，シミュレータではほとんど再現できていないと言えるでしょう。どんな精巧なシミュレータであっても，やはり人体の完全なる代用というわけにはいきません。ただ，このようなシミュレータの特徴（利点と欠点）を踏まえれば，非常に面白い有用な教育・学習ツールになることは間違いありません。スキルアップトレーニングルームは，近いうちにスキルアップセンターに改組の上，利用者を学外の医療従事者にも広げて，より多くの皆様のお役に立てるよう準備を進めています。皆様から多くのご意見を頂き，活用法についての知恵を拝借して，ますます有益な施設となってゆくよう努力を重ねていこうと思います。

全国国立大学病院事務部長会議「東北・北海道地区」会議を開催

全国国立大学病院事務部長会議「東北・北海道地区」会議が去る６月29日，弘前大学が当番校となり同大医学部附属病院で開催されました。

会議には，北海道，旭川医科，東北，秋田，山形及び弘前の６大学の事務部長，担当課長が参加しました。

開催に当たり，弘前大学の藤病院長の挨拶の後，同大寺坂事務部長の議長により「東北・北海道地区診療報酬実務担当者連絡会（仮称）の設立について」「事務連携の推進について」「大規模災害発生時，総合的に対応できる組織について」及び「全国国立大学病院事務部長会議への提案議題について」の４項目をテーマに各大学から状況報告を行うとともに活発な議論が交わされました。

前日に行われた，第38回東北・北海道地区国立大学医学部・医科大学事務協議会との合同懇親会では，和やかな雰囲気のもと有意義な情報交換が行われ，今後に実りあるものとなりました。

次回当番校は秋田大学。

（総務課）

高校生「外科手術体験セミナー in 青森」を終えて

去る６月30日，青森高校において青森市周辺地区の高校生を対象に外科手術体験セミナーを開催しました。このセミナーは，子供たちに「医師の仕事の素晴らしさを知ってほしい」との思いから始まった外科医を中心とするボランティア活動です。私たち医療従事者自身が病院から外に出て現地で子供たちと触れ合う事にこだわり，青森市，八戸市，五所川原市，むつ市に出向く形で開催してきました。2009年から始めたこのセミナーも今回で５回目となります。外科医29名，研修医３名，医学部学生20名の他，医療機器企業から23名，総勢75名がスタッフとして参加し，56名の高校生を指導しました。

スタッフ全員の個性あふれる自己紹介で緊張した雰囲気も和らいだ後，いよいよ子供たちは術医を纏い外科医に変身します。１グループ８名ずつに分かれ，医学生に先導されながら７つの模擬手術を順に体験しました。手術台や無影灯を備えた本物さながらの手術室コーナーでは，豚・鳥肉を

相手に「手術」をしてもらいます。人体モデルを使ったスーチャリングコーナーでは，術者と助手に分かれて閉腹操作をしてもらいます。「医学生でも少し難しいかな？」と思う課題でも，器用に達成する子供たちの能力には毎回驚かされます。３時間半を超えるセミナーは弘前大学医学部の紋章の入った修了証書の授与，そして自動縫合器を使う際の合言葉「ファイヤー」で終了となりました。

参加した高校生の感想文では，「普段は絶対に体験できない貴重な内容でした」「予想以上に皆さん明るくて優しかった」「弘前大学に入学するために猛勉強します」という意見が多く，セミナーの開催目的は達成されているものと考えています。また，「医学生と話ができて有意義だった」という意見も多く，医学生が参加することにも大きな意義のあるセミナーだと強く感じています。

子供たちが純粋に感動している姿を目の当たりにすると私たちも嬉しくなります。自分たちが医師を志していた頃を思い出し，また新たな活力が湧いてきたりします。次回は是非，皆さんも参加してみませんか。

（消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科
講師　和嶋直紀）

緩和ケア公開講座を開催

緩和ケア診療室では，これまで本院スタッフを対象に緩和ケア勉強会を行ってきましたが，他施設から是非参加したいという要望が多く寄せられたため，今年度からは公開講座のかたちで緩和ケア勉強会を開催しています。講師は緩和ケアチームメンバーが中心となって，４月は「緩和ケアについて」を麻酔科医佐藤哲観と緩和ケア認定看護師浅利三和子が担当し，７月は「緩和ケアにおける精神症状と治療」「心理的ケア」を精神科医菊池淳宏と臨床心理士島田恵子の担当で開催しました。スタッフの緩和ケアに対する意識は高く，先月行われた「精神症状と治療」「心理的ケア」では，医学部臨床小講義室がほぼ満席状態になるほどでした。参加メンバーをみると，医師１名，看護師41名，薬剤師25名，他 MSW，事務職など他職種にわたり，院外からは46名の参加をいただきました。協力していただいているアンケート調査結果では，緩和ケアを必要とする患者・家族への関わりがあると答えた方が全体の８割以上，次の勉強会にも参加したいですかという質問では９割以上の方に賛同いただき感謝しています。今後も院内外問わず，「緩和ケア」の普及・啓蒙活動を継続して，みなさまと共に患者さん・ご家族へより質の高い緩和ケアを提

供できるように勉強していきたいと考えていますので，宜しくお願いします。開催スケジュールや内容については当院ホームページでもご覧いただけますので，みなさまのご参加をお待ちしています。

（腫瘍センター緩和ケア診療室）

●●●研修医のひとりごと●●●

二年次研修医
村上　祐介

当院の初期臨床プログラムにて，１年次は三沢市立三沢病院で，今年４月から２年次研修医として当院で研修させていただいています。

私は約25年前に大学進学のため，大阪から青森を経由し，青函連絡船を利用して札幌へ参りました。その後，医師として臨床を行いたいという「夢」を持ち，2007年に弘前大学医学部へ３年次学士編入学という貴重な機会を授かり，その扉を開くことができました。青函連絡船への乗換時に，雪降る凍えるホームに初めて降り立った青森駅のある当県が新天地になるとは驚きでしたが，天命とも感じました。

将来，当県で，特に医師不足の地域で総合医として活躍したいという「夢」を抱いています。よって，疾患の数や種類や臨床指導力は当県でも都会の研修病院に比べ何ら遜色がないこと，そして地域性の理解も重要であることから，母校での臨床初期研修を迷わずに決めました。

初期研修では，①診断力，②疾患・病態学の知識力，③コミュニケーション力の３本柱を体得すべきと考えています。１年次は三沢病院で①と③とを中心に，熱心な指導医の下で「勘」に頼らない真の診断学やチーム医療を体得しました。２年次では当院で②と③とを中心に，病理や輸血部など，より高度・専門的分野も含む各科にて手技や治療法も併せて体系的に体得中です。また，内科系－外科系などといった科の枠を超えた高度チーム医療に参加できるなど，当院でしか経験できない貴重な機会にも恵まれています。

病気でなく人を診て，体だけでなく心もケアできる総合医になる「夢」の実現を目指して，当院各科ならびに地域協力病院（外ヶ浜中央病院，六ヶ所村・尾鮫診療所，弘前・沢田内科医院）にて，患者さんからも多くのことを学ばさせていただき，真摯に臨床研修をさせていただく予定です。今後とも，患者さんのご協力，ならびに指導医の先生方やコ・メディカルの皆様からのご指導・ご鞭撻を賜りたく何卒よろしくお願い申し上げます。

七夕・納涼祭り

【七夕飾り】

７月２日から８日まで，正面玄関の一角に七夕用の笹を用意しました。病気の回復を願う短冊がたくさんある中，「○○さんと結婚したい」，「宝くじが当たりますように」というものや，『座布団一枚！』と頷いてしまった川柳までありました。

ともあれ，皆さんの願い事が叶いますように…。

【納涼祭り】

７月26日，病院正面玄関横で納涼祭りを開催しました。入院中のお子さんや入院患者のお子さんたちに，家族と一緒に「宵宮」のような雰囲気を味わってもらいたい…そのような思いから，今年は「露店」を１つ増やし，ヨーヨーつり，スーパーボールすくい，的あて，輪投げ，千本つりなどを用意しました。

暑い時間帯にもかかわらず，多くのお子さんたちが集まってくれたので，とても賑やかに開催することができました。また，大人の参加者も多く，皆さん童心に返って楽しんでいるようでした。両手にいっぱいの景品を持って喜んでいるお子さんたちの姿に，逆にスタッフの方が元気をもらいました。

最後に，運営に協賛してくださった団体や企業，また，準備・運営・後片付けに協力してくださったスタッフの皆さんに，この場を借りてお礼申し上げます。

（医事課）

【 編集後記 】

藤病院長が牽引される新体制も早や４ケ月が過ぎました。この間，藤イズムはすっかり院内に浸透し，様々な課題や諸問題に精力的に取り組まれておられます。私ども事務部もさらにしっかりと病院長をお支えしていかなければと，あらためて気を引き締めているところでございます。

さて，南塘だより第67号をお届けします。本原稿を書いているのは８月３日，気温も連日30度を超え今年も盛夏の季節を迎えております。そして正に今日は，弘前大学のねぷた出陣の日でございます。「ヤーヤドー！」声高らかに提灯を掲げながら，自身３回目の弘前の夏，そして熱い夜に気合いを込めたい。

原稿をお寄せいただきました皆様に深く御礼申し上げます。

（広報委員　北脇清一）

弘前ねぷたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぷたまつり」が８月１日から７日間行われました。弘前大学のねぷたも大学と地域住民との交流を図ることを目的として，１日，３日，６日の３日間参加し，昭和39年に初参加以来，連続49年の出陣を果たしました。

１日には，附属病院外来診療棟正面駐車場において，小児科に入院中の子供達や保護者，医師，看護師，事務職員等による「小型ねぷた」が運行されました。本学はやしサークル「弘前大学囃子組」等による太鼓と笛の音にあわせて，子供達は「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ，津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

また，病院内では，外来待合ホールにミニねぷたが飾られ，来院された方々にも好評でした。

（総務課）